

となりの医療さん

「妊娠力」に年齢の壁

現在の日本では婚姻夫婦のおよそ10%が不妊症に悩むとされますが、この割合は増加傾向にあります。高学歴社会やジェンダーフリーは女性の社会進出を促し、ライフスタイルの変化は晩婚化をもたらしました。統計では初婚の平均年齢は1950年には23歳でしたが、2005年では28歳へと高齢化が着実に進んでいます。

さて妊娠力を左右する最大の要因は女性側の年齢です。意外と知られていませんが、

ASKALレディースクリニック院長

② 中山雅博さん

女性の妊娠力は20代をピークに、30歳を過ぎると早くも低下を始め、40歳以降では急速に低下します。客観的評価のできる体外受精を例にとると、当院での妊娠率は、30代では30%であるのに対して、40代では10%にまで落ち込みます。さらに妊娠後の流産率でもみて30代では15%であるのに対して40代では40%にまで上昇します。

これは加齢により卵子の細胞質機能が低下し、核の染色体異常が増加するためです。

卵巣には臓器としての寿命があり、閉経とはすなわち卵巣の臓器不全の状態です。閉経の年齢の中央値は50・5歳であり、一方、初産年齢は29歳ですから結婚して子づくりを開始する頃には、すでに卵巣機能はピークを過ぎていくなりになります。さらに加齢により子宮筋腫や子宮内膜症などの生殖器の腫瘍のほか、クラミジアなどの性感染症にさらされることも多くなり、これらの要因が妊娠力に影響します。

有名人の高齢出産や不妊治療の進歩がニュースで取り上げられると、高齢女性においても妊娠を期待できると思われがちですが、年齢階級別に見てみると国内の全出生数のうち、40歳以上が占める割合は、1955年と2006年を比較しても共に2%であり、晩婚化に見合った割合で増加しておりません。生殖医療に従事する者としては、年齢の壁の高さに日々無力感さえ感じております。

と出産・育児との両立は生殖医療にとどまらず難しい課題です。生物学的には早い時期の妊娠が理想と分かっているにもかかわらず、異性との出会いは運命である以上、独りではどうにもならないものでしょう。

こうしたジレンマを解消することはできませんので、キャリア時代を生きる未妊女性としては、出産にもある程度の計画性を持つとともに、自らの妊娠力を保つ努力が求められるのではないのでしょうか。

次回は、生活環境に潜む妊娠力を脅かす諸問題について、お話しさせていただきます。(この項つづく)